

新着案内

# 町田の文学

第44号 2019.11.1 発行 町田市民文学館ことばらんど

## 「白洲正子のライフスタイル

### 暮らしの遊び展」開催中

(二階展示室にて 一二月二二日(日)まで)

〈詳しくはポスター、チラシ、  
ホームページをご覧ください〉



# 白洲正子自筆原稿 「春の香り」公開中

本展覧会では、今年度当館が新たに購入した、白洲正子自筆原稿「春の香り」(『白洲正子全集』第一巻収載)も初公開されている。一九五二(昭和二七)年、「婦人公論」に掲載されたものである。初期の原稿から垣間見える正子の姿を担当学芸員が語る。

## 後年の正子節の片鱗漂う

### 四二歳「春の香り」

白洲正子が八一歳の時に「芸術新潮」に連載を始めた「白洲正子自伝」の第一回は「祖父・樺山資紀」で始まる。

世にいう好々爺ではなかったが、穏やかな表情の奥に底知れぬたくましさを秘めた大男であった。孫にとっては豪傑でも英雄でもなくて、ただのおじいちゃんだったが、甘やかされたことはいちどもなく、さりとして特別厳しかったわけではない。



祖父・樺山資紀に抱かれた正子 (1915 (大正4) 年頃)

資紀は幼名を覚之進といい、鹿児島藩士、

橋口与三次の三男として生まれた。若い時の覚之進は、掟に反した仲間の首を一刀のもとに斬り落とすような気性の激しさを持っていたという。のち同藩士・樺山四郎左衛門の養子となり、名も資紀と改めた。薩英戦争、鳥羽・伏見の戦、会津戦争、西南戦争に従軍したのち陸軍少将になるも、その後海軍に転じ、一八九〇(明治二三)年には第一次山縣内閣に海相として入閣。日清戦争後に海軍大將に昇進。初代台湾総督に任ぜられ、伯爵を授与される。

この祖父から精神的な影響を強く受けた正子は、一四歳の時に初めて樺山家の故郷・鹿児島島の地を踏んだ。アメリカ留学の前に一度は故郷を見せておく必要があると考えた両親の計らいであった。

\*

「春の香り」は「婦人公論」一九五二(昭和二七)年四月号に掲載された随筆である。丸善の四百字詰め原稿用紙五枚にブルーブラッ

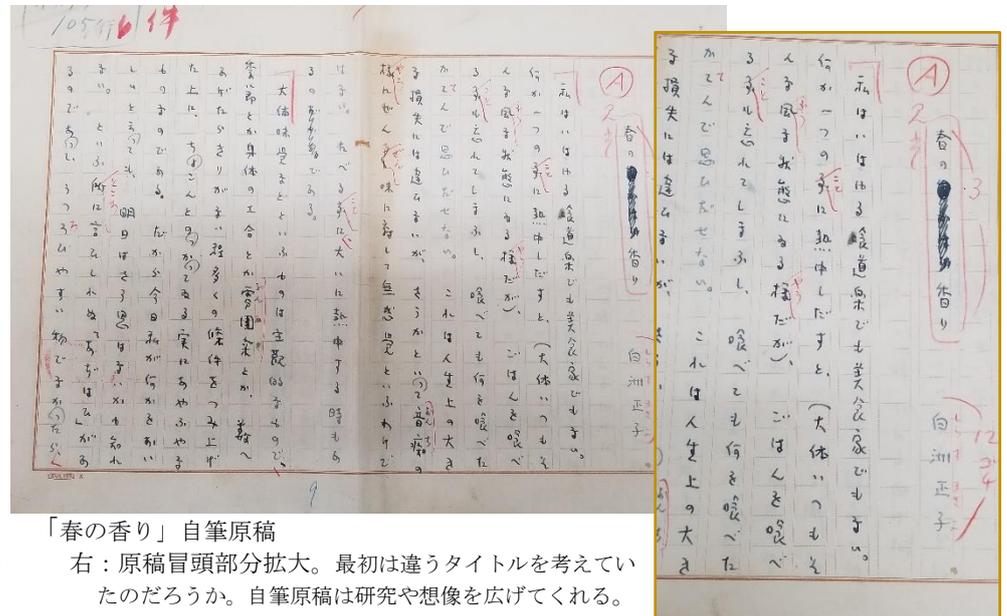
クのインクにて訂正の跡も少なく、故郷・鹿児島で四月から五月の木の芽どきに作られる「鹿児島ずし」について綴っている。

内容に目を移すと、「大体味覚などといふものは主観的なもので、季節とか身体の工合とか雰囲気とか、数へあげたらきりが無い程多くの条件をつみ上げた上に、ちよこんとのつかつてゐる実にあやふやなものなのである」「世の中にはほんとおもしろい物もまづい物もない。たゞ、ちやうどいい「時」があるだけだ」と味覚についての持論を展開したのち、「何かかう春霞のやうにとろんとした味がするのである」と、後年の正子節の片鱗が見られる独特の表現で「鹿児島ずし」のおいしさや作り方、親戚中が集まってすしを食べていた、祖父の時代の習わしなどについて記している。

同年八月号ではグラビアにも登場し、随筆「香港・変らない街」(原稿は当館所蔵)を掲載。しかしグラビアの正子の肩書きは「白洲夫人」とある。ちなみに同年に寄稿している「文藝春秋」では「白洲次郎氏夫人」、「俳句」では「評論

白洲正子

「春の香り」を執筆した頃



「春の香り」自筆原稿

右：原稿冒頭部分拡大。最初は違うタイトルを考えていたのだろうか。自筆原稿は研究や想像を広げてくれる。

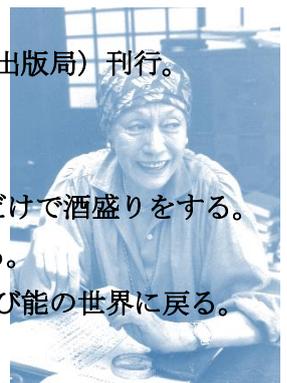
家」。この時、正子四二歳。すでに『お能』『たしなみについて』『梅若實聞書』を刊行し、文芸評論家・小林秀雄や、美術評論家・青山二郎との交友も始まっていたが、「随筆家・白洲正子」となるには、しばしの時間と修練が必要であった。

(学芸員 神林由貴子)

# 白洲正子略年表

町田市民文学館「白洲正子展」(2019)年譜より作成。p1-3で使用した写真(原稿を除く)はすべて武相荘所蔵。

- 1910 (明治 43) 0歳 1月7日、貴族院議員・樺山愛輔、常子の次女として誕生。
- 1916 (大正 5) 6歳 学習院女子部初等科入学。梅若實に入門し、能を習い始める。
- 1924 (大正 13) 14歳 3月、女子学習院本科(中期)を修了。9月、ニュージャージー州のハートリッジ・スクールに入学。
- 1928 (昭和 3) 18歳 ハートリッジ・スクールを卒業、帰国。白洲次郎(26歳)と知り合う。
- 1929 (昭和 4) 19歳 白洲次郎と結婚。母・常子死去。
- 1942 (昭和 17) 32歳 10月、鶴川村能ヶ谷(現・町田市能ヶ谷)に農家を買う。細川護立に古美術について教わり、骨董屋を歩くようになる。
- 1945 (昭和 20) 35歳 河上徹太郎夫妻が白洲家に疎開、2年間滞在。8月終戦。
- 1946 (昭和 21) 36歳 河上の紹介で小林秀雄と知り合う。青山二郎と出会い急速に骨董世界に没入。
- 1952 (昭和 27) 42歳 「婦人公論」4月号に「春の香り」が掲載される。
- 1956 (昭和 31) 46歳 銀座の染織工芸店「こうげい」の経営者となる。以後約15年間多くの工芸作家を見出し、世に送り出す。
- 1964 (昭和 39) 54歳 『能面』縮刷改訂版(求龍堂)刊行。同書により第15回読売文学賞(研究・翻訳部門)受賞。10月、西国三十三ヵ所観音巡礼の旅に出る。
- 1965 (昭和 40) 55歳 『巡礼の旅—西国三十三ヵ所』(淡交新社)刊行。次男、小林秀雄長女と結婚
- 1967 (昭和 42) 57歳 『梅尾高山寺 明恵上人』(講談社)刊行。
- 1969 (昭和 44) 59歳 「かくれ里」を「芸術新潮」に連載。取材のため近畿地方の村里を訪ね歩く。
- 1972 (昭和 47) 62歳 『かくれ里』により、第24回読売文学賞(随筆・紀行部門)を受賞。
- 1974 (昭和 49) 64歳 「十一面観音巡礼」を「芸術新潮」に連載。大和、近江などの古寺を訪ねる。
- 1975 (昭和 50) 65歳 『十一面観音巡礼』(新潮社)刊行。
- 1978 (昭和 53) 68歳 「鶴川日記」を「読売新聞」に連載。
- 1979 (昭和 54) 69歳 骨董と人生の師だった青山二郎死去。『鶴川日記』(文化出版局)刊行。
- 1983 (昭和 58) 73歳 小林秀雄死去。
- 1984 (昭和 59) 74歳 『白洲正子著作集』全七巻(青土社)の刊行開始。
- 1985 (昭和 60) 75歳 次郎死去。「葬式無用、戒名不用」の遺言により、遺族だけで酒盛りをする。
- 1986 (昭和 61) 76歳 「西行」を「芸術新潮」に連載。西行ゆかりの地を訪ねる。
- 1987 (昭和 62) 77歳 友枝喜久夫の能「江口」を見て、その名人芸に感動。再び能の世界に戻る。
- 1988 (昭和 63) 78歳 『西行』(新潮社)刊行。
- 1991 (平成 3) 81歳 「白洲正子自伝」を「芸術新潮」に連載開始。『いまなぜ青山二郎なのか』(新潮社)、『雪月花』(神無書房)刊行。
- 1994 (平成 6) 84歳 『風姿抄』(世界文化社)刊行(99年までに『日月抄』『雨滴抄』『風花抄』『夢幻抄』『独楽抄』『行雲抄』刊行)。『白洲正子自伝』(新潮社)刊行。
- 1995 (平成 7) 85歳 『白洲正子 私の骨董』(求龍堂)刊行。
- 1997 (平成 9) 87歳 『両性具有の美』(新潮社)、『おとこ友達との会話』(新潮社)刊行。
- 1998 (平成 10) 88歳 多田富雄の著作に解説を書く。最後の執筆となる。12月永眠。



# 新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。  
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。

## 宮内 純子

1934年、朝鮮慶尚北道大邱府(現・韓国大邱広域市)生まれ。公立小学校教員を務める。児童文学創作グループに所属し、指導を受ける。著書に『白絹のワンピース 私が少女のとき戦争が始まって』『青い風船』など多数。町田市在住。

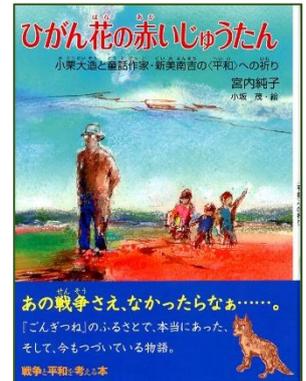
## 『ひがん花の赤いじゅうたん』

小栗大造と童話作家・新美南吉の〈平和〉への祈り』

宮内純子／著 小坂茂／絵 くもん出版 2014.12

晩年の小栗氏に取材した骨太の児童向けノンフィクションである。

新美南吉が生まれ育った愛知県半田市岩滑を流れる矢勝川の土手は秋になると一面のひがん花で真っ赤になるといふ。それは小栗大造という一人の老人の思いから始まった光景だった。南吉の作品『ごんぎつね』にも象徴的に登場するひがん花に、戦争で死んでいった仲間たちへの鎮魂と平和の尊さを伝える使命を託し、一人で土手に植えていた大造の姿は、やがて多くの人たちの心を動かすことになる。



## 『詩集 カクレンボ街路樹』

高橋しげを／著

創英社／三省堂書店 2019.7

## 高橋 しげを

東京都生まれ。本作が14冊目の詩集(英文も含む)。エッセイ『童心に囲まれた仕事の中で』は、第7回エッセイ奨励賞受賞。信条は「雑草のごとく踏まれても強く生きる」。町田市在住。

ほとんどすべての作品に、文字の配列、イラストの挿入、題名の入れ方など、言葉だけでなく、視覚的效果が生かされている。その分、難解にも思えるが、帯に掲げられた「かがやく朝の光 舗道に染めて 笑っている空と雲 / 心 心に 夢忘れない 真実の言葉 アナタニ捧げます・・・」の言葉を素直に受け取り、詩を楽しみたい。



## 【主な寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク(山の文芸誌)」「三田文学」

詩誌：「璞(あらたま)」「構図」

短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶(さくや)」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺(あふりね)」「訝(こだま)」

「都市」「風土」「波」「俳句界」

「蒼茫(そうぼう)」「八千草」

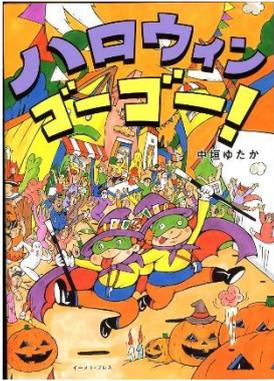
その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

# 新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。  
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。

## 『ハロウィンゴーゴー！』

中垣ゆたか／作・絵  
イースト・プレス 2019.8



ところで、双子が最初に切り刻んだお母さんのスカート、どうなったんでしょう！「びっくりさせられることにはなれっこよ」のお母さんも、怒ると思うなあ。

イタズラ好きの双子が巻き起こすハロウィンの大騒ぎ。ストーリーもさることながら、作者ならではの細かい絵の隅々に目をこらし、発見するヨロコビも健在。作中でお母さんがつくった「パンプキンおぼけドムパイ」のレシピ付き。読者の作ったパイをSNSに投稿して楽しむ仕掛けもある。

### 中垣 ゆたか

1977年生まれ。イラストレーター、絵本作家。『カムチャッカ号へんてここうかい記』（風濤社）、『ひらいてびっくり！のりものりもの』（偕成社）などの絵本をはじめ挿絵、雑誌表紙など多数の作品がある。2019年9月にはイラストレーター本田亮とのコラボレーション「43万人の個展」を町田パリオで開催した。町田市在住。

## 『ギブミー・チョコレート』

飯島敏宏／著 角川書店 2019.8



昭和七年生まれの著者による初めての小説。「少国民」と呼ばれた世代の「かぎりなく事実に近いフィクション」である。

あとがきによれば、昭和の戦争ものは暗く、重苦しく描かれることが多いが、少国民世代が集まると、「俺たち、あんなに暗くなかったなあ」と誰もが口にするという。その時代を生きていた子どもたちは、どんな日常を生き、何を見ていたのか、ぐいぐい引き込む筆力で読ませられる。エピソードの同窓会シーン、同級生でたった一人の東京大空襲犠牲者の親友をめぐるやりとりには、胸をえぐられる。

### 飯島 敏宏

1932年生まれ。円谷特技プロダクションで映画部所属の監督を務めた。作品に『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』などのウルトラシリーズなどがある。著書に『バルタン星人を知っていますか？』がある。町田市在住。

## 市民の皆様の文学作品をご寄贈ください

町田市民文学館では、市民の皆様が著した文学作品（詩歌、小説、エッセイ、児童書や同人誌など）を収集・保存しています。ぜひご寄贈ください。

また、勝手ながら、貸出用と保存用の2冊をご寄贈いただけますと幸いです。今後とも市民の著作の収集に努めてまいりますので、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。



# 〈貴重雑誌をめぐる物語〉

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域文芸誌など、約八六〇タイトル、一万冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

その四

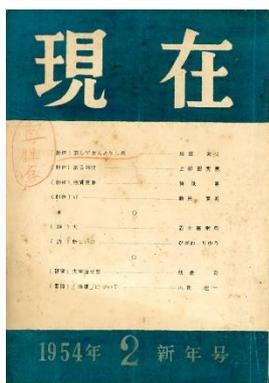
## 同人誌「現在」

編集発行人…桜田常久

発行所…アテネ書房・「現在」の会など

刊行頻度…隔月刊

所蔵巻号…第二号（一九五四・昭和二九年一月十日）〜第十一号（一九五七・昭和三二年十月十日）。なお、後継誌として「第二次現在」一号（一九六一・昭和三十六年十一月一日）あり。



「現在」第2号  
1954(昭和29)年

前回に続いて、戦前「平賀源内」で芥川賞を受賞した町田ゆかりの作家・桜田常久をめぐる雑誌をご紹介します。

「現在」は一九五三（昭和二八）年、桜田五六歳の時に若い仲間たちと創刊した文学同人

誌です。当館所蔵の全二冊（後継誌を含む）は桜田旧蔵のものですが、残念ながら創刊号が欠けています。因みに、国立国会図書館では創刊号・第二号・第四号が欠号です。

第二号の巻末近くには同人名簿が掲載されており、町田を中心に一九名の名前が並んでいます。刊行の中心メンバーは、飯倉良、上柳田実憲、周藤勝彦、降旗要、そして桜田常久の五名です。

### 同人たちの素顔

第五号の〈後記〉に、同人たちの素顔を垣間見ることのできる、興味深い記述があります。「僕ら五人の同人たちは、二、三、四、五十代と年令別にも豊かだが、農業、商業、戦傷者、工員といった具合にも分けられる。（中略）―某日。桜田常久宅で同人会が開かれた。忌憚のない意見で、飯倉良の作品が群を抜いて批判を受けた。それは、いわゆる同志的な愛情の中ではあったけれど…。／帰途は雨になった。降旗は戦争で片足を奪われ、もう一さえ不自由だっ

た。山坂の道は赤土が露出して滑りがちで、最初、降旗の巨体は、上柳田の背に託さなければならなかった。続いている坂道では、異国の若者のようにきや、しや、で美貌な飯倉の背に彼のかなししい肉体はとめられていた。そして唯一の傘は、一番意気地のない僕の右手で、絶えず降旗の頭上にかかげられた。先程の激論は誰がしたかのように―。」

文末にSとあり、周藤の筆と分かります。

### 「現在」が目指したもの

第四号〈後記〉では、「農業、工員、配達員、傷病兵と私たちの生活は苦しい。食生活さえ誠一杯の私たちが雑誌発行の費用をつくりだす苦しみはどうして書きあらわすことはできない」と、同人誌維持の苦勞が記されています。そんな彼らが「現在」に込めた思いは、各号の扉などに掲げられた次のマニフェストに窺うことができます。

〈新しいリアリズムの探求と、マンネリズム文壇文学へのレジスタンスに燃え、私たちは同人誌『現在』を発行しているのです。〉

「新しいリアリズムの探求」や「文壇文学」が何を指すのかは、第三号〈後記〉の「文壇などという箱庭の住人にはたして働くもの作品が理解できるものだろうか。（中略）私ども

の生活は「演技」などではないのだ。過去のプロレタリア文学の誤ちを繰り返さないように、私どもは、しつかり生きなければならぬ。」という文章から、ある程度推測することができます。

## 「現在」発表の桜田作品

第七号になると、「私たちの『現在』も漸く発行の度に世評に上るようになり、先号も三四の雑誌新聞紙上でとりあげられた。うれしいことである。」といった自負と喜びの言葉が、後記を飾るようになります。

桜田の「自作農」(第三号)、飯倉良「枯野道」(同)、上柳田実憲「二百十日」(第四号)、降旗要「折れた松葉杖」(同)などが、『文学界』その他の雑誌や新聞紙上で、好意的に採り上げられるようになるのです。

一方桜田は、創刊号の「ドラリカ」(未見)をはじめ、「おシゲさんとケン兵」(第二号)、「自作農」(第三号)、「おいらの町の留置場」



桜田常久(1897~1980)  
『平賀源内』で芥川賞受賞(1940)。約50年間町田に暮らした。

(第四号)、「落葉組合」(第六号)、「押保上等兵の奇妙な経験(連載第一回)」(第十号)などを次々に発表します。とりわけ「自作農」、「おいらの町の留置場」、「落葉組合」は、戦後の町田地域での農地改革と、自身の農民組合運動の体験を下敷きにした農民文学として、また町田の現代史に取材した地域文学として、大変興味深いものです。

「自作農」について、『文学界』(一九五五年三月号)の〈同人雑誌評〉で文芸評論家の浅見淵は、「…執拗な性格の中に滑稽味のある農民の種々相が、風刺を伴って軽妙に捉えられている。時代感の把握が、和田伝、伊藤永之介などより新鮮なのは注目値する。…」と評価しています。

来年は、桜田没後四〇年、これらの作品にも、何とか光を当てたいものです。

## 同人・飯倉良は津村秀介？

「現在」の編集や送本など実務一切を担ったのは飯倉良でした。彼は、創刊号から「灰色の旅路」、「枯野道」、「ピエロ」、「夜の貌」などの小

説、また評論や詩を毎号発表し、ほかに『近代文学』などにも発表の場を得ます。

本稿執筆のための調査で、思わぬ事案に行き当たりました。「飯倉良」という名前は、一九八二年に『影の複合』で作家デビューし、以後(事件記者 浦上伸介シリーズ)などで人気を博した推理小説作家、津村秀介氏の本名なのです。

津村氏は一九三三年、横浜市生まれ。二〇〇〇年に六六歳で病没しましたが、略歴によれば、一九五〇年代から本名で「文芸首都」などに純文学を発表しています。

「現在」第三号の飯倉の小説「枯野道」の主人公が横浜生まれで、「東京の在のちいさい卸屋」で配達員をしているという設定や、第二号の同名簿の住所が、「町田町原町田九丁目小山方気付」となっていることなどから、「現在」創刊時に、のちの津村秀介こと弱冠二〇歳の飯倉良が、同人として参加していた可能性は十分にあります。ただし、これは津村氏側の確かな資料で、裏付けられなければなりません。

桜田にとって「現在」は、文壇へのカムフラッシュを期した、血の滲むような営みであったと同時に、若い才能と切磋琢磨する喜びに満ちた場であったのかもしれない。

それにしても「現在」の創刊号、どなたかお持ちではないでしょうか。

(当館元館長 守谷信二)

(注・引用の旧字は読みやすいよう新字に変えています)

# ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

2019年10月1日～27日  
中垣ゆたか『ハロウィンゴーゴー！』絵本原画ミニ展示を開催しました。  
(終了しました)



## 「西村宗・サラリ君展 サラリ君とみる昭和と平成」開催中

会期中展示替えがあります。  
第1期：10/29(火)～11/24(日) 昭和  
第2期：11/26(火)～12/28(土) 平成

休館日：毎週月曜日（祝日は開館）  
毎月第2木曜日  
開催時間：9時～22時

1980年3月24日から2010年3月31日まで約30年間にわたって、産経新聞朝刊に連載された「サラリ君」。

この作品は、常に世相を反映したストーリーと馴染みやすいキャラクターで多くの読者に親しまれてきました。

作者の西村宗氏は、現在・玉川学園に住んでおり、連載10000回を迎えた翌年の2010年には、その功績により第29回日本漫画家協会賞優秀賞を受賞しました。

本展では、文学館開館年の2006年に連載された漫画の中から家族を題材にした作品と、時事的な作品、昭和と平成合わせて約80点を展示いたします。

## 2019年度お宝紹介展示（サロン）今後の予定

（原稿・原画保護など諸般の事情により変更される場合もあります）

- 西村宗・サラリ君展（展示中～12/28）
- 作家の手紙展（2020/1/7～3/15）
- わたなべゆういち絵本原画展（3/17～4/5）

休館：毎週月曜日（祝日は開館）毎月第2木曜日  
サロンの開館時間：9時～22時

「町田の文学」第44号 2019年11月1日発行

編集・発行／町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田 4-16-17 TEL 042(739)3420

FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター

Twitter@machida\_kotoba



ことくん  
©中垣ゆたか



らんちゃん  
©中垣ゆたか

\*この冊子は350部作成し、1部あたりの単価は171円です（職員の人件費を含みます）